

2021年
1月8日
金曜日

井口 泰 教授 (労働経済学)

疫病の時代と私たちの責任

ローマ人への手紙 第12章11節
「勤勉で怠らず、霊に燃え、時に（主に）仕えよ。」

第一次世界大戦後、危機に陥ったキリスト教世界に衝撃を与えた神学者カール・バルトの『ローマ書（講解）（1922）』（S474、480-481）は、第12章第11節の後半のギリシャ語原文を「時に仕えよ」と訳し、論争となりました。多くの聖書の翻訳は、「主に仕えよ」という一般的意味しかないと考えられていたからです。実はマルティン・ルターは、同じ箇所を「時代に飛び込め」と読んでいました。

それでは、「時に仕える」というのは、どういう意味なのでしょう。それは、コロナ危機の現代に生きる私たちに、何を求めているのでしょうか。

今年度、チャペル「経済学と聖書」は金曜日午前にライブストリームで発信し、同時に、ビデオで公開しました。今という瞬間に、神様が共に働いて下さると思うからです。毎日、日本でも世界中からも、感

染拡大と経済危機が報じられます。何が起きているのか、将来はどう変わるのか、私たちが主体的に考え、責任をもって行動を起こすことが不可欠です。

聖書は、人間が、被造物（ギリシャ語では、生物と地球環境の二種類の用語）と敵対関係にあることを指摘しています（ローマ8:20、22）。ウイルスの起源は数十億年前なのに、人間の歴史はせいぜい十万年です。人間と被造物の間に生じた敵意や憎悪を取り除き、共存する道を探ることが、危機を超え未来を創造する道だと思えます。

そもそも人体機能は、数億の体内微生物の働きで支えられています。同時に人類は、病原性の細菌・ウイルスの外部からの侵入に対しては脆弱です。

感染症と人類の出会い、聖書でも、紀元前10世紀以上にも遡ります。人類が地球上を移動、戦争・内戦で生態系を破壊すると、一方で飢餓と貧困が、他方で宿主を出た菌・ウイルスの拡散で疫病が繰り返され

ます。例えば、ダビデがエルサレムの王の時代にも、戦乱及び飢餓に加え、疫病で7万人が倒れたとされています（歴史誌第一21・14）。

13世紀から14世紀を中心に欧州を襲ったペストが、欧州の人口を半減させただけでなく、既成の権威を失墜させ、近代科学の発展を促し、特に、都市における公衆衛生行政の確立が、その後の経済・文化の復興の基盤になったことは、現代の私たちへの重要な示唆に富んでいます。

第1に、都市人口が巨大化し、グローバルな相互依存が強まった現在、都市封鎖（ロックダウン）を繰り返すことは危険です。短期的又は局所的ならともかく、大規模に繰り返すと経済活動の低下や投資減退、廃業・失業、貧困を生み、人命の損失を大きくします。

第2に、日本は、1990年代以降、感染病床を削減し保健所を大きく減らしました。日本の人口当たり病床数は世界一多いのに、感染病床は公的病院に偏り、ICUに柔軟性が乏しく、医療崩壊が起きかねない

のです。公衆衛生と医療体制の立て直しは、日本経済の再生にとっても大事な鍵です。

第3に、北里柴三郎博士はペスト菌の発見者で、戦前の東京の警視庁衛生課は公衆衛生行政の先駆けでした。現在も、北里研究所の発見した人工抗体は、安全性の高いワクチンや治療薬開発に適しています。政府は、ワクチンの外国メーカーからの輸入を優先せざるを得ません。しかし、国内の研究開発の強化や安全な国産ワクチンの安定供給を、中長期的な戦略とするように願います。

最後に、コロナ危機による廃業・休業に加え、消費不況で過剰雇用を抱え、生産性の低い飲食業や小売業などで、低賃金の非正規労働者の生活は困難を増えています。外国人労働者や技能実習生にも、失業・所得減少の危機が迫っています。雇用調整助成金が、非正規雇用者や技能実習生の所得減少の場合にも、迅速・確実に支給される仕組みを求めています。★シリーズ最終回を再構成しました。■